

被災地 復興進まず

AMDA、支援策を検討

約五千八百人の死者を出したインドネシア・ジャワ島中部地震から二十七日で一カ月。国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市櫛津）は緊急救援を終え、現在は調整員梶田未央さん（三巴）倉敷市IIが現地に残っているが、被災地の復興

は進んでいないという。一カ月後の被災地はどう変わったのか。復興支援に向けた調査を重ねている梶田さんは、山陽新聞の電話取材に「家の建設は進まず、依然テント暮らしの人々が大勢いる。何も変わっていない」と答えた。

AMDAは地震発生直後から日本、インドネシア、マレーシアなど七カ国計四十一人の医師らを派遣。六月下旬まで、ジャクジャカルタから北西約三十キロのプランバナンを中心に、村々で巡回診療を行った。

復興支援策としてAMDAは、診療センターの再建、衛生教育の実施などを検討しているが、具体的には決まっていない。

梶田さんは国連が開催する会議などに出席して情報収集しているほか、

地元の保健センターの要望などを調査。「地元からは救急医療従事者の研修を要望する声が上がっている。防災や次の災害に備えたいという意識が芽生えているようだ」と話した。

（斎藤章一朗）